

現象学的な質的研究が会う倫理

村上靖彦（大阪大学）

私の研究歴を振り返りながら、（倫理学ではなく）倫理へと導かれた経緯を考えてみたい。まず学生時代は「レヴィナスは倫理について語ったことがない」という立場で博士論文を執筆した（*Lévinas phénoménologue*, Jérôme Millon, 2001）。

帰国の後、2003年から2008年まで精神病理学的な自閉症研究を行っていた際の立ち位置は、今から考えると当事者を尊重するという点で倫理的に問題があったと反省している（私だけの問題ではなく精神病理学という学問分野に内在する倫理的な鈍感さがある）。

2010年以降、看護師へのインタビューと参与観察を重ねることになる。当初は、個別のデータの詳細な分析をすることが使命であって、とりたてて医療倫理のような問題に関係しているとは考えていなかった（『摘便とお花見』、医学書院、2013他）。ところが、データ分析を重ねるに従って、際立って個別性の高い実践と同時に、ある共通するケアの方向性が見えてくることになった（『ケアとは何か』、中公新書、2021）。結果としてこの「共通する方向性」は倫理的な方向性にほかならないことに気づかされることになる。

さらに、2014年から大阪市西成区で子ども子育て支援の現場の調査を始めている。この地域の支援者たちは子どもの権利条約に理念化されるような強い倫理的な方向性をもともと意識しながら活動し、私自身の研究も彼らの実践及び子どもの権利をアドヴォケイトする方向性のもになってきている（『子どもたちがつくる町』、世界思想社、2021、他）。

そしてもう一つの倫理との関わりが生まれてきている。この点は現象学的な質的研究という方法論に内在するものであるが、これについてはシンポジウムで詳細を論じたい。